広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	V・コンスタンディノス「有利な底」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 27 : 110 - 103
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051917
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

V・コンスタンディノス「有利な底」

橘　孝司　訳
國立臺中科技大學應用日語系　助理教授

奇妙で他に類を見ないその現象はこんな状況下で始まった。

首都の典雅な一角、直径十キロほどの範囲の土地が突然わずかに沈み始めた。最初に感じられたのは、舗装道路が歩道に比べて低くなった時だった。それまでは逆の現象が起きていた。道路工事の際、古いアスファルトを除去するより新しいアスファルトを積み上げる方が手っ取り早かったためだ。しかし、まもなく別の兆候が現れた。つねに鑑賞用の街路樹に覆われていた交通標識がドライバーに見えるようになった。その後他のことも観察された。町で最も高い地点の眺望を楽しめる豪華なレストランを設置しようと、建築法規を無視し一階分増築していた大きなホテルがあったのだが、その眺望が著しく限られてしまったため、投資が無駄になってしまった。

首都大学地学科長を筆頭とする地質学の権威たちも、その現象に納得できるような科学的説明を与えることができず、特殊な組成の柔らかい地面が時間とともに圧迫されただの、土地の深層部が深みへずれたため地表でも現象が感得されただのと、ただ推論をするだけだった。最新の説では、地殻の局所的老化ということが言われた。しかし、いずれも、その区域が一律水平に沈んでいきながら、大きな被害も建物の傾きも生じないのを説明することができなかった。電線や電話線は地面より上方に設置されていたため、いかなる問題も起きなかった。ただ、水道管が一本破裂したが、地盤沈下によるものか、よくある水道システムの故障なのかは不明だった。

しかしながら地盤沈下は続いた。数ヶ月後の測量では六十六センチ下がっており、それほど大きくはないものの、いっそう感じられるようになった。かくして生じた問題に対処すべく、段違いになった道の部分を繋いだり、中央の排水管を傾斜させたり、歩行者のために階段を敷

設するといった工事が必要となった。

誰もが心配になったが、殊にこの地域を通行することの多い人々は、険しい傾斜で滑って手足を折るのではないか、建物が上から崩れてくるのでないか、急に口を開いた地面に飲み込まれるではないかと恐れた。しかしながら、そういったことは起きず、却ってこの領域以外の首都中で微かな地震が感じられるほどだった。これだけで、少しずつ始まっていた人々の流出を止めるには十分だった。が、何であれ、都心を郊外と繋ぐこの地域を簡単に捨て去ることは困難だったのだ。ある一角には様々な役所があり、別の区画には大企業の事務所が並び、さらには三軒の大型デパートや高級マンションを有する地区もあった。不動産の価値は以前から天井知らずだった。もちろん、現状では新たな売買や賃貸は不可能だったが、そこからの移転を決める前に、家主か借り手かに拘わらず、よく考える必要があった。

しかし、地面の沈下は着実かつ均一に進行し、現象が始まって一年後、一メートル十センチに達した。とは言え、犠牲者も被害も現れなかった。が、何としても漏水冠水を防ぐため、中央の水道管の延長や塑性セメントによる排水といった方法が考案され、国際的特許として認定された。

地質学者たちは現象解明の試みをもはや諦め、それを食い止めるための提言をするのが精一杯だった。深度三百メートルに鋼とニッケルの混合物で補強したコンクリートを注入するという案や、騎馬像、二階建てバス、公文書庫（周知のように紙は鉄に次いで重い）などのとりわけ重い物体を移動させる、という案もあった。さらには、たえず土地の深層部を浸食している地表の湿気の除去という提言もあった。ただ、庭や並木や花壇への水遣りを停止するのは極めて容易なことだったが、雨水の落下を避けることは困難だった。だが、これらのいずれも、美観への悪影響や技術的問題、膨大な費用などのため実施されることはなかった。

そうこうする間にもその領域は沈み続け、さらに一年後には深さ三メートルほどに達した。同時に、すでに発生した問題は拡大し、新たに生じた問題は緊急の解決を要した。土地の段差のため歩行者にも車両にも事故の恐れがあり、地面の縁に沿って防護柵が巡らされ、その区域が隔てられた。道路工事により、上と下の地面の道路が安全に繋がれた。問題の領域を囲む部分に造られた壁の或る部分には、二つの地面の間に石の階段が設置され

た。これらは全て、この国ではよく知られていることだが、事が急を要するため公共の物流法規を曲げて電光石火のごとく準備された。公共事業省や有力者たちの住まいがこの地域にあることも有利に働いた。

しかし、沈下は止まなかった。その一年後七・五メートルに達するとともに、ニュースは国境を越えた。世界中の著名な地質学者や土壌学者がこの奇妙な現象を調査しにやってきたが、この者達もまた裏付けのある解釈や現実的な解決を提出することはできなかった。国際的な新聞が報道し、当然の結果として、この国は世界中の関心の的になった。その後、観光客達が殺到し始めたが、外貨を落としていく彼らの方が科学者やジャーナリストよりも歓迎された。

もう一年が過ぎると、領域の沈下は十一メートルほどになり、そこから生じた様々な問題の調整には胆力と想像力が必要とされた。幾つかの建物は、入口が周囲の土地の壁にごく近く、通行が困難になったため、上の階に追加の入口を開け、その地面に接続できるようにした。二つの地面にまたがる森の池は、必要なポンプ設備の助けで可憐な滝に姿を変えた。地下鉄の軌道の一部が地上に現れた。つまり、こういったこと全てのせいで、町の区画整理計画をある程度変更する必要が生じたのだ。

次の年、二つの地面の差は二十二メートルになり、同時に状況は悪化した。そこで、絶えざる沈下への対応を見越して、両地面を繋ぐ道の部分的な整備（当然蛇行する軌道になるが）が必要になった。他方で、本来美的とは言い難かった壁は蔓草や有名画家の壁画や趣味の良い広告で飾り立てられた。最後に、石の階段に代えてエスカレーターが設置された。

一年後、領域は初めより三十三メートル低くなった。その深さは深刻だったが、それでも、その場所を捨てる理由にはならなかった。逆に、不動産の市場は深刻な硬直期の後、活気を取り戻し、地価の上昇は止まるところを知らなかった。理由は様々だった。その領域は国際的な関心を集め、重要な観光地になっており、何千もの観光客が連日雪崩(なだ)れ込んでいた。多くの人がそこを見るだけのためにチャーター便を飛ばし、首都のほかの地域や国の他の場所には見向きもせずに去った。このことは、例えばレストラン、喫茶店、ホテル、民芸品の商店、銀行、タクシーなどで働く多くの人たちにも活力となった。他方で、環境汚染は他の場所より少なかった。スモッグは周囲の土地の上空にとどまり、問題の領域は清浄な大

気の層に覆われていた。さらに、驚くべきことに駐車場不足の問題も解消された。険しい勾配のため、その区域へ降りていく車は少数であり、しかもやむを得ない場合のみであったからである。

＊＊＊

突然全く予期しないことが起きた。その領域が沈下を止めたのだ。日々の沈下を記録してきた測量計の針は動かなくなった。数日過ぎ、数週間、数ヶ月、一年が過ぎたが、状況は変化しなかった。驚きに続いたのは、まず熱狂。しかし最後には苛立ちとなった。この点は説明するのに難しくない。沈下が始まった当初、もちろん多くの人が何らかの衝撃を受けていたが、状況が常態化するにつれ、いい面、悪い面に合わせ新しい生活習慣に自らを適応させていった。新しい状況から恩恵を受ける者も少なくなかった。観光業に携わる人々、正常な生活を続けるのに必要な公共事業を請け負う建設会社、さらに労働者や技術者である。不動産を所有する人々もそうだった。そういった事業のため土地が高い値段で買い上げられた。店舗は需要の高まりのために価値を増し、以前は始発のバス停にあった部屋が、静かな道に面するという特権を持つようになった。政府もまた問題をより包括的に理解した。その区域で生まれた動きは、常態化していた国家の病的な経済全体への強力な強壮剤となった。大多数の職業に有利な結果を連鎖的に引き起こし、非課税の資産を増加させ、かくして外貨の収支バランスを改善し、失業の歯止めとなっていた。そうである以上、その区域が動かなくなっては、他の種類の、おそらくはより深刻な問題が生まれることになった。

幸い、この停滞は生じたときと同じような予期せぬやり方で解消された。ある日、測量計の針が再び、しかも以前よりも速いスピードで動き出した。このことは、長い干魃の後たっぷりと雨が降った時のような反響を引き起こした。その区域だけではなく、首都中の通りに群衆が飛び出し祝いあった。

＊＊＊

再始動以来二年と数ヶ月が過ぎようとする頃、その区域は総計五十五メートル沈んでいた。つまり、年に十一メートルの速度である。もちろん沈下が速くなったことで、二次的な問題も起きたけれども、培われた経験のおかげで、少しばかりの超過労働と蓄積された創意工夫によって首尾よく処理された。当局は、領域が突如一定期間停止した後、高速で動き出した場合に取るべき方策を

見越した緊急計画を作成はしたものの、実行するには及ばなかった。そのような異常は二度と見られなかったからである。沈下は着実なリズムで進行を続け、対処に必要な作業の早急な計画立案、及び、その都度設定される期限内での実施で十分だった。

こういった作業の中からより重要なものを選択し続けることが、この領域の生活を保障するために必要な多岐にわたる仕事の実像だった。人間の才能と想像力を絶えず刺激する仕事であった。

六十六メートルで水道網はより深い地点への流れがもはや確保できなくなったので、適切なポンプを使って、上向きに流すことが必要となった。七十七メートルで、町の他の部分を繋ぐ道路とエスカレーターが円滑な交通には不十分、いやむしろ困難であることが分かった。それゆえ、それらを延長すると同時に二つの巨大な高速エレベーターが設置された。一つは歩行者用、もう一つは車両用であり、乗り降りの都度使用料が必要だった。八十八メートルで、区域全体の経済活動の硬直停滞が、特に外国人観光客数に表れた。その活性化のため、国際会議、展示会、関連催し会場に使える巨大な建築群が造られた。また、周囲の土地の端から端まで観光用ロープウェイが設置され、低い領域の見事な展望を可能にした。

＊＊＊

九十九メートルで沈下は全体にわたって完全に停止した。測量計の針はこの地点でピクリとも動かなくなった。人々はすぐに、何かの予感からであろうか、区域が深度の限界に達したことを悟った。かくして前回のような圧迫感は感じなかった。

しかし、それ以上沈下する理由もなかった。最も低いこの地点で、領域は現象進行の頂点に達していたのだ。様々な技術によって、そこでのあらゆる基礎的機能が円滑に動くことが保証されていた。住民はほかの地域の住民を羨む必要がないばかりか、ある点ではより大きな特権を獲得していた。生活のリズムは平穏でストレスも少なかった。納税の点でも恵まれていた。建築物の高さは、周囲の土地の高さを超えず美的景観を壊さない限り、まったく自由だった。他方、政治方針とは無関係に――事は国益に関わっていた――歴代政府の重点的取り組みのおかげで、その区域は類稀（たぐいまれ）な人類の遺産として、国際的に承認された。加えて、神秘的な性格、審美的な魅力を付与した要素があった。その深さは、町の最も高い場所の標高と正確に同じであったのだ。この点で、土地がい

つか、沈下と同じように不可解な仕方で上昇し始めるのではないか、と住民は不安に感じた。時折そういった噂が流れたが、国家の経済的安定と社会的平安を忌々しく思う闇社会が広めたものであるとして、政府により完全に否定された。

その区域は、普段「下町（ウレ・ザウス）」と呼ばれたが、専門用語では区域全体が「井戸（ワレアル）」、その地面は「底（ビスミン）」と呼ばれた。

【解説】

ここに訳出したのは、現代ギリシャ人作家で詩人V・コンスタンディノス（Β. Κωνσταντίνος, 一九三一～）の短編小説「有利な底（Ένας πλεονεκτικός πυθμήν）」である。一九九〇年に国家文学賞短編小説部門を受賞した第二短編集『真夜中の謎（*Το αίνιγμα του μεσονυκτίου*）』（一九八九、テッサロニキ、ネアポリア社）に他の十編とともに収録されている。

本名コンスタンディノス・ヴァシス Κωνσταντίνος Βάσσης。アテネ生まれで、アテネ大学で法学を学んだ後、外交官としてコンゴ、ハンガリー、イタリア、ドイツなどで勤務。サウジアラビア、メキシコ、日本で大使を歴任した。その縁で、『怪談』のギリシャ人作家ラフカディオ・ハーン《小泉八雲》を記念する「小泉八雲記念公園」の設置（一九九三年、東京・新宿）にも尽力している。

勤務の傍ら、V・コンスタンディノスの筆名で詩・短編小説を発表（後には本名を用いている）。詩集は六冊、短編集は三冊に及び、それ以外に、エッセイ集『二十一世紀に向かって（*Εγκάριον του 21ου αιώνος*）』（二〇〇八）や言語学評論『現代ギリシャ語の諸問題――科学・イデオロギー・政治――（*Το πρόβλημα της νεοελληνικής γλώσσας. Επιστήμη - Ιδεολογία - Πολιτική*）』（二〇一五）なども著している。数多くの言語に通じ、ギリシャ・スペイン学会会長も務めた。

本作のみならず、『真夜中の謎』に収められた諸作品は、非常に特徴的な文体で書かれている。

まず、なんと言っても純正語（カサレヴサ）であることに驚く。したがって、語彙や言い回しが堅く、様々な節が組み合わさ

り長い文が続く。会話はほとんどなく、人物の心理描写も書き手の主張も抑えられ、報道文・解説文のような印象を与える。一方で、明らかにギリシャの話であるにもかかわらず、ドキュメンタリーであることを拒否するかのように、地名が一切現れず、人名も使用されない。「有利な底」には特定の主人公がいないが、他の作品のように存在する場合でも「総裁」「特別顧問」「総理大臣」「国家の長」「教授」「反体制派」「労働者党」「野党第一党」のような役職名、政治的レッテル、ないし組織名そのものが用いられ、個人的な性格がほとんど奪われている。

「有利な底」はマキス・パノリオス編『ギリシャ幻想短編小説』第三巻（一九八九、エオロス社）にも収められている。（実は、今回翻訳を試みたのは現代ギリシャの幻想小説や大衆文学を紹介したいとの思いからである。）パノリオスのこの選集は、リアリズムが主流の現代ギリシャ文学にあって稀少・貴重な試みであり、ＳＦ作品も随分と採られているのだが、しかし、コンスタンディノス作品の肝（きも）はそのＳＦ風の奇抜な設定とは別のところにあるように思われる。地盤沈下の原因は説明されることもなく、人間の叡智によって問題が最終的に解決されるわけでもない。それよりも作家は、異常現象を前にして右往左往し、時にはそれを逆手にとる強靭で打算的な人間の滑稽な姿を、文語体を使って距離を置きながら、冷徹に描こうとしている。

『真夜中の謎』所収の他の短編を読むと一層その感を深くする。反体制派を懐柔するための政府の斬新奇抜な手法を描く「威信の防衛」、銀行改革に抜擢された特別顧問の大胆な打開策があの手この手で骨抜きにされる「危険な使命」など、強大な国家や組織に翻弄され妥協せざるを得ない人間の姿が戯画的に描かれている。

異常な自然現象の代わりに奇抜な社会情勢をテーマにすれば「状況の激変の故に」が生まれる。そこでは、ただ年金受給者のために結成された「年金党」が不可思議な躍進を続け、冗談ごとでは済まされなくなり、社会に騒擾と不安が広がっていく。いわば「有利な底」の政治版である。

読みやすいミステリ風の構成を持ちながら、この作家らしい狙いが込められているのは表題作「真夜中の謎」だろう。事件が時間軸に沿って進行する他の作品と違い、ある国で「午前」「午後」が逆に表示されているという不可解な謎を追っていく。その背後には歴代政権の政治抗争史が隠されている。

「等閑（なおざり）にされた部門」では軍事クーデター鎮圧後、民主派政府は秩序回復に乗り出すが、まず「言語改革」からというのがギリシャらしい。文法に一家言持つ作者の筆にも力がこもる。民主化と民衆語が一体視され、政府が設立した言語統制機関により擬古体は排斥されてゆく。その挙げ句、クーデター防止と社会の安定にもっとも貢献したのは言語であるという奇妙な理屈で締め括られる。

社会的な戯画が基調である以上、大部分の作品の結末は悲惨であるが、「保全の大いなる意味」は少し毛色が違っている。会社の設備保全に人生を捧げてきた専門家が、自身の人生の保全ができていないことに気づき、不本意な過去と折り合いをつけようと旅立つ物語は後味がよい。

最近刊の第三短編集『惑わしの概念（*Μια παραπλανητική έννοια*）』（二〇〇七）でも、特異な文体を用いて描く社会の風刺画は健在であるが、お伽噺の結構を持つ「妥協的解決」、政府の不動産政策を背景に、主人公の意図を代弁するかのような愛犬・愛猫の奇行を描く「家畜たちの奇妙な振る舞い」、十五世紀のスペインという明確な時代・場所設定の歴史物「大異端審問官最後の審理」などの新機軸も目を惹く。

作家は新たな方向へ向かおうとしているのかもしれない。

＊＊＊

V・コンスタンディノスの第二詩集『臣従列伝』（一九七六）は一部翻訳が日本ギリシア語ギリシア文学会『プロピレア』三号（一九九一）に掲載されており、ネットでも閲覧可能。

http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/32574/20141016190845827257/Propylaia_3_49.pdf

また、マキス・パノリオス『ギリシャ幻想短編小説』は『プロピレア』二十三号（二〇一七）所収の拙稿「現代ギリシャ幻想小説序説――後ビザンツ期から十九世紀末まで――」で触れておいたので、ご参照いただければ幸いである。

作品の翻訳を快諾してくださった敬愛するコンスタンディノス・ヴァシス氏に心よりお礼申し上げます。